

カガヤキ

No.41(2019.1.15 刊行)、広報委員会編集

茨城県立図書館発行
禁複写転載©広報委員会

特別企画

H30 年度ボランティア研修会実施報告 —水戸市内歴史探訪—

県立図書館普及課
羽石康弘

はじめに

県立図書館は、12月16日(日)AM 10:00より、水戸市内において、県立図書館ボランティアを対象とした「ボランティア研修会」を開催した。

H30年度に開催されたボランティア協議会の会合において、いくつかの開催案を検討した結果、「市内歴史探訪」となった。

研修目的

目的は、ボランティア活動にかかわる幅広い知識を身につけるとともに、活動

意欲を高め、資質の向上を図ること、また、市内歴史探訪ということもあり、日頃、かかわりのないボランティア同士のコミュニケーションの場としたいという思惑もあった。

市内歴史探訪

下記に探訪コースを示す。

水戸城趾(弘道館→彰考館跡→薬医門)→東照宮→旧千波湖船着場・旧武家地(藤田東湖屋敷跡→安積澹泊屋敷跡)→紀州堀→旧町人地(泉町周辺)。

最初の予定では、大工町附近の第五番目の堀までということであったが、時間の読みが甘かったため、そこまで到達できないまま、時間になってしまった。

以下に個々史跡の感想を記す。

・弘道館

水戸藩第九代藩主の徳川斉昭によって立案された偕楽園と弘道館はワンセットになっている。

斉昭は、儒学思想から、「一弛一弛」の思想を重視した。「一弛」とはピンと張った弓の状態である。そのような学問・武芸に励む思想によって建てられたのが水戸藩の藩校である弘道館である。「一弛」とは、時には弛めて、息抜きも大切であるという思想である。そのような思想によって造園されたのが、偕楽園である。勉強や仕事ばかりでは疲れてしまい、能率が上がらないため、遊ぶことも大事という考え方である。こうした思想は、江戸時代には珍しいものであった。しかも、偕楽園は、武士の子弟だけでなく、特定の日を指定し、町民にも

開放していた。「皆が楽しめる公園」の意として命名された。斉昭が名君とされる理由はこうしたところにもあった。

弘道館は、国の特別史跡になっており、幾度の戦火を免れた正庁・至善堂・正門の三箇所は、重要文化財に指定されている。正庁が、水戸空襲時に燃えた時には、近所の住民が、バケツリレーによって、消化し、守った。弘道館の敷地には、約 60 種約 800 本の梅が植えられており、偕楽園とともに梅の名所となって



弘道館(東側。徳川斉昭創設。江戸末期における日本の三大教育機関のひとつ) (桜井撮影)



弘道館(南側) (桜井撮影)

いる。武士の子弟に対し、文武両道の修練を積ませようと、武芸はもとより、医学・薬学・天文学・蘭学などの幅広い学問を採り入れた「総合大学」と言うべき存在の教育施設であった。当時の藩校と

しては、国内最大規模であり、全国各地の藩校設置に大きな影響を与えた。

- ・大手門

大手橋の車の通行はできない。

- ・彰考館

水戸藩が大日本史を編纂するために置いた修史局(歴史編纂所)である。

- ・旧水戸城薬医門

桁行三間・梁間一間・切妻造・茅葺風銅板葺・箱棟付の単層薬医門である。建立年代を特定する資料は、発見されていないものの、安土桃山時代末期に、佐竹が水戸城にいた時期に建てられたと推定されている。水戸藩の施設ではないことに驚く。



弘道館から大手橋方向の光景(中央奥は建設中の大手門、建設費約 4 億円) (桜井撮影)



建設中の大手門の背後の光景(再建された江戸時代の塀など、右手奥は茨大教育学部附属幼稚園) (桜井撮影)



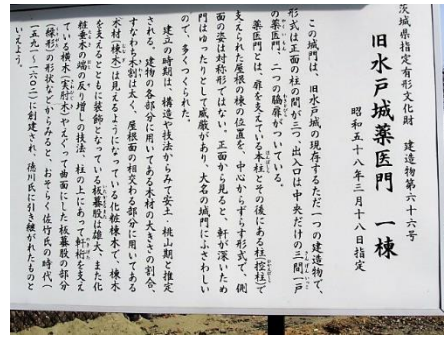
再建された江戸時代の堀など通称「水戸学の道」(右側手前は茨大教育学部附属小学校、その奥は水戸三高、左端手前奥は水戸二中)(桜井撮影)



再建された杉山門(水戸三高の道路を挟んで合い向かい、さらに奥の森のような場所は水戸一高)(桜井撮影)



たったひとつ残存する水戸城の薬医門(水戸一高内で、後ろは校舎)(桜井撮影)



薬医門の説明文(桜井撮影)



再建された棚町城下門(この右端背後に徳川頼房像、左端奥は水戸三高の校舎の一部、左端の道路を下ると徒歩10分で水戸駅北口)(桜井撮影)

・東照宮

水戸藩初代藩主徳川頼房により、元和7年(1621年)に、徳川家康を祀る神社として創建された。戦前、社殿は、旧国宝に指定されていたが、昭和20年(1945年)の戦災で焼失し、昭和37年(1962年)に現在の社殿が造営された。境内には頼房が奉納した銅灯籠、徳川光圀が造らせた常葉山時鐘、徳川斉昭の考案による安神車(戦車)などが現存している。

・旧千波湖船着場

昔の千波湖はいまの三倍と推定されている。徳川頼房が、上市と下市の交通の便を考え、慶安4年(1651年)、千波湖に土を運んで造らせた堤で、東は水門橋附

近、西は東照宮下まで、全長約 2.5km の長さがあった。その道は、新道と呼ばれていたが、通行人は、夏の暑さに苦しみ、元禄になって、光圀が、数千本の柳を植えて日除けの役割を与え、柳堤(りゅうてい)と名づけた。その名残が現在の柳堤橋である。

・旧武家地藤田東湖生誕の地

東湖は斉昭側近である。全国の尊王志士の指導者的存在でもある。安政大地震で母を救おうとして圧死した。

・安積澹泊生誕の地

澹泊は「格さん」として描かれた人物のことである。徳川光圀が招いた明の儒学者の朱舜水(しゅしゅんすい)に入門し、学問を修めた。その後、大日本史の編纂に尽力した。

・紀州堀

水戸藩初代徳川頼房の前に一時的に藩主になった頼宣(よりのぶ)が紀州藩主になったことから、何かの縁で紀州堀と名づけられた。

・泉町附近

老舗うなぎ料亭「中川楼本店」は武家地だった場所に建てられている。水戸駅方向を正面にすると道路の左が武家地、右が町人地。町人地は、「間口の幅が狭く、奥行が広い」という特徴がある。江戸時代から現代まで、時が経過しても、なお、区画の名残を残している土地があり。そこも名残のひとつである。時代劇には、「長屋」が出てくるが、こうした町人地の地形に合わせて作られていた。

・良く知っているはずの水戸に多くの発見あったことに、驚いた。

・身近な地域を良く見てみると、新たな発見があることを再確認した。

・気分は、水戸黄門となり、江戸時代にタイムスリップした。

・いつもはかかわりのない他のボランティアと話げできた。

・座って話し合いや講演を聞くなどが研修ではなく、今回のような実際の眼で見て、何かを感じるものも良い。

・自分がボランティアをしている場所のことを知ることも大切と感じた。

考察

今年度の目的は、市内歴史探訪を行うことによって、ボランティアとして、地域を知り、活動意欲を高め、資質の向上を図ることとした。普段、日常生活を送る上で通過する道をゆっくり歩くことにより、江戸時代の水戸の雰囲気を感じることができ、英気を養えたのではないだろうか。さらに、生涯学習の新たな視点になるものと期待したい。

コミュニケーション論という視点で考察した場合、たとえば、新卒採用でコミュニケーション能力を重視していると答える企業は、80%を越えている。その視点で考察すると、数多くの利用者とかかわる県立図書館ボランティアのコミュニケーションという視点からも、意義のあるものであった。

参加者の感想

編集後記

(1) 企画記事について 水戸城は水戸徳川家の居城でした。石垣と天守閣のない珍しい城です。基本的な情報は以下サイトに掲載されています。

<https://www.travel.co.jp/guide/article/24129/>

私は、水戸市に転入して、40年になりますが、そのうちの30年間、東京からの仕事関係者(新聞社とテレビ局の取材担当者)を百数十回にわたり、水戸城史跡・弘道館・偕楽園などに案内しています。学術セミナーも開催しています。

最近の10年間は、市街地隣接公園として、世界第二位の面積を有する偕楽園公園(偕楽園・千波湖・千波公園)の周囲約7kmのコースも案内しています。

水戸城史跡(拙宅から40分)と偕楽園公園(拙宅から15分)は、毎回、新鮮さを感じる緑豊かな自然に包まれた心休まる自然と史跡の探索コースです。

(2) 委員長任期についての私見 県立図書館ボランティアの各グループの委員長と副委員長の任期については、規約で明確に定められているわけではありません。しかし、個人的には、全体のバランスと流れからすれば、3±1年くらいが好ましいと考えています。

私の任期は、すでに、4年弱となっており、できることならば、編集経験があって、いまの編集方針とレベルを維持できるだけでなく、さらに、高度化できる能力を有する後任者を探しています。

(3) 通信紙の条件 通信紙発行の目的は、

ボランティア相互の意思疎通をとおして、ボランティアの相互理解と相互協力を作り出すことにあります。

通信紙が県立図書館HPに掲載されていることを考慮すれば、それだけではなく、特定組織の活動内容の紹介に留まらず、日本や世界のあらゆる分野のボランティアに共通する本質的な事項も記載しなければならないように思えます。

両者を満たす記載内容は、「年次報告」(No.25と39参照)と「ボランティア論」(No.30参照)のふたつに集約できるように思えます。

「年次報告」は、各グループの記載内容を統一し、さらに、全体を網羅するため、1)年度目標、2)人工数(No.39参照)、3)作業内容、4)成果、5)次年度課題の項目を立て(No.31参照)、1ページ以内にまとめるようにしてください。各グループが実施した県立図書館外の施設の見学や調査などについては、3)作業内容の項目に記載してください。

「ボランティア論」とは、経験の長短にかかわらず、各自のボランティア活動で得られた経験・ノウハウ・提案の体系化です。そのような内容は、後継者の育成のために、不可欠な教科書のような役割を担うものと思います。

誰しも、原因は異なるものの、いつか、必ず、県立図書館ボランティアから、去らねばならず、蓄積した経験とノウハウは、仲間の未来のため、置き土産(「ボランティア論」として、残しておかなければなりません。たとえ、去っても、蓄積し知識と思いやりは、永遠に残ります。

桜井 淳

【補足】担当通信紙

FY	No	HP 掲載	備考
H27	25	○	再発行優先版 H27 年度年次報告
H27	26	○	再発行優先版 H27 年度全体会合 報告
H27	27	○	モデル版 ボランティア論
H27	28	×	テスト版
H27	29	×	テスト版
H28	30	○	モデル版 ボランティア論
H28	31	○	モデル版 投稿規定作成 編集裁量範囲 掲載までの経緯
H28	32	作成中	ボランティア詳細データ収集中 特性分析 (多変数解析含む)
H28	33	○	モデル版

			通信紙位置づけ
H28	34	手続中	モデル版 図書館論 ボランティア論
H29	35	×	テスト版
H29	36	手続中	ボランティア論
H29	37	手続中	ボランティア論
H29	38	○	モデル版 火災避難訓練実 施報告
H30	39	○	H29 年度年次報告
H30	40	○	県立図書館現状 ボランティア論 未来図書館論
H30	41	○	H30 年度ボランテ ィア研修会実施 報告
H30	42	作成中	上條哲追悼企画
?	43	準備中	H30 年度年次報告

注 1) 「再発行優先版」とは内容より再発行優先。

注 2) 「モデル版」とは標準化できる良い内容。

注 3) 「テスト版」とは意見を聞くための試作。